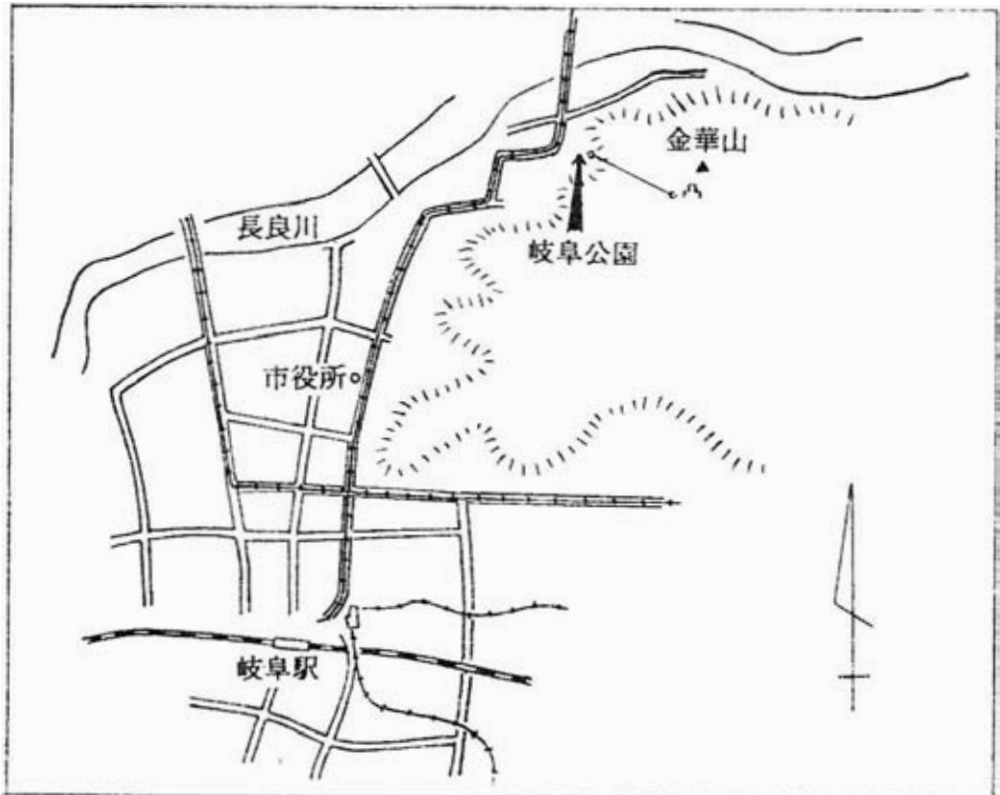


岐阜市指定史跡岐阜城跡
(千疊敷) 発掘調査

現地説明会

昭和62年5月16日(土)・17日(日)
岐阜市千疊敷・千疊敷下(岐阜公園内)
(バス・市内電車線 岐阜公園前下車)



岐阜市教育委員会

1 はじめに

この発掘調査は、岐阜市制100年を記念して岐阜公園を再整備するのに先立ち、遺構の有無を確認するため59年11月に着手したものであるが、その結果16世紀の石垣や通路が発見されたので、その後史跡整備・遺構復元を目的として今日まで継続して実施しているものである。この地は、織田信長が金華山山頂の岐阜城とともに建設し、ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスもその壮麗さに驚嘆したといわれる居館の伝承地である。

発掘区域は、金華山西面の谷が平地に出る先端、川筋より南側の部分である。ここには谷川の両側に2・3段のテラス状の地形が認められ、字名としては最上段が「千畳敷」、中段以下が「千畳敷下」にほぼ相当する。現在まで3次にわたる発掘面積は合計約3,000m²である。

2 主な遺構

発見された遺構は、時代の異なる上層と下層の遺構群に分けられる。上層遺構は、下層遺構を埋めた整地層を基礎として築かれている場合が多い。

この調査では、これらの遺構を混乱のないように分類・整理するため、遺構に以下のような種別ごとの略号と発見順の番号を付けている。

SV01～18＝巨石列・石垣 SS01～03＝通路 SD01＝水路状遺構
SA01＝土塁 SX01～04＝階段状遺構・その他 SB01・02＝建物跡
SF01～03＝石積み施設

《上層遺構》

ア．巨石列SV01～04

南に8個(SV01)、東の山側に3個(SV02)、西(SV03)と北(SV04)にそれぞれ2個見つかっている。石は金華山のものと思われ、形は板状、最大の高さは高さ1.7m、長さ2.9mを測る。これらは石を立て並べたもので、石垣のように山側または土塁の下端を抑え、通路の両脇に配置されている。南側のSV01を除いて南北あるいは東西方向に正確に並べられている。

イ．通路SS01

巨石列SV01～04及びその延長線上にある石を抜き取ったと思われる跡によつ

て区画されている。全体の平面形はクランク状で幅4.5m、確認できる部分での長さ約50mある。南西側から入って北方へ折れ上がり、土塁の東側を進んだ後さらに東の山側へ折れる道筋が想定できる。

ウ. 土塁S A 01

通路S S 01北行部分の西側にあり、北から南へ半島状に張り出す。付け根からの長さ約16m、残存高約2～2.5mある。

エ. 石垣S V 05

小平地Ⅰの南端の区画と水路状遺構S D 01上層の南岸の区画を兼ねている。石材は比較的大形のものが多く、最大級のもので横2.0m、縦0.8mを測る。石を横長にして積み上げている場合が多い。石の表面は赤く変色しているが、これは火を受けたためと思われる。石垣は大半が崩れ、2段までしか残っていない。残りのよいところで高さ1.3mある。

オ. 水路状遺構S D 01(上層)

石垣S V 05・11・12・13によって区画されている。この地区が谷筋にあたり現在の谷川が近接していることや、その形状からみて、水路として使用された可能性が高い。山側の東方から西方へ下り、小平地Ⅰの手前で曲折してさらに北西方向へと続いている。現在確認されている範囲内で長さ約24m、幅2.6mである。深さは、残りのよい石垣でみた場合基礎から上端まで0.9mである。

先述のS V 05以外は比較的小形の石材(大き目のもので横0.8m、縦0.3m)を用い、主として横長に積み上げている。S V 05と同様に火を受けたと思われる赤変部分が認められる。

カ. その他の遺構

階段状遺構S X 01、通路S S 02 a・02 b、集石遺構S X 03・05、礎石建物跡S B 01等がみられる。

《下層遺構》

ア. 石垣S V 18

小平地Ⅱの下層に南北方向に存在している。小形の石材(横0.2m、縦0.15m程度)をかなり急勾配で積み上げたものである。上部は削平を受けている可能性が高い。残高1.7mを測る。

イ. 水路状遺構S D 01 (下層)

石垣S V 14・15・16によって区画されている。上部に上層遺構があってこれ以上掘れないため全形は明らかでない。巨石(最大のもので横0.9m、縦0.8m)を下方に配し、上方に小形の石材(横0.3m、縦0.2m程度)を積み重ねていくという特徴的な積み方で石垣が作られている。

ウ. 石積み施設S F 01・03

S F 01は、東西・南北それぞれ0.7mの正方形の平面形をしている。石積みは2～3段で、上部は削平を受けている可能性が高い。深さ0.44mある。

S F 03は、東西0.65m、南北1.05mで、南北に長い長方形の平面形である。石積みは1～2段程度で、S F 01と同様上部削平の可能性が高い。深さ0.3mを測る。

エ. その他の遺構

階段状遺構S X 04、石垣S V 19・20等がみられる。

3. 出土遺物

比較的少量で、大多数が細片化している。焼き物の類ではほとんどが土師(はじ)質皿(素焼きの皿)で、他に少量の瀬戸・美濃産の施釉陶器(碗・皿が主体)と輸入陶磁器がみられる。瓦は軒先に用いる丸瓦や平瓦(軒瓦)を含めてごく少量発見されている。土製品には一括出土の土錘の他、土鈴が数点ある。金属製品の主体は鉄釘で、その他飾金具・刀の切羽(せっぱ)等が1・2点みられる。また和鏡が一点出土している。

瀬戸・美濃産施釉陶器の年代観から、大多数の遺物が16世紀代のものと考えられる。

4. まとめ

2年半にわたる発掘調査の結果、千疊敷・千疊敷下の地下には数々の遺構が埋もれていることが明らかになった。のみならず、上層遺構の下にはより古い下層遺構が存在することも判明した。上層遺構群は、数回の矩折(かねおれ)をくり返して上っていく通路をはじめとして、その周辺に土塁・石垣・階段状

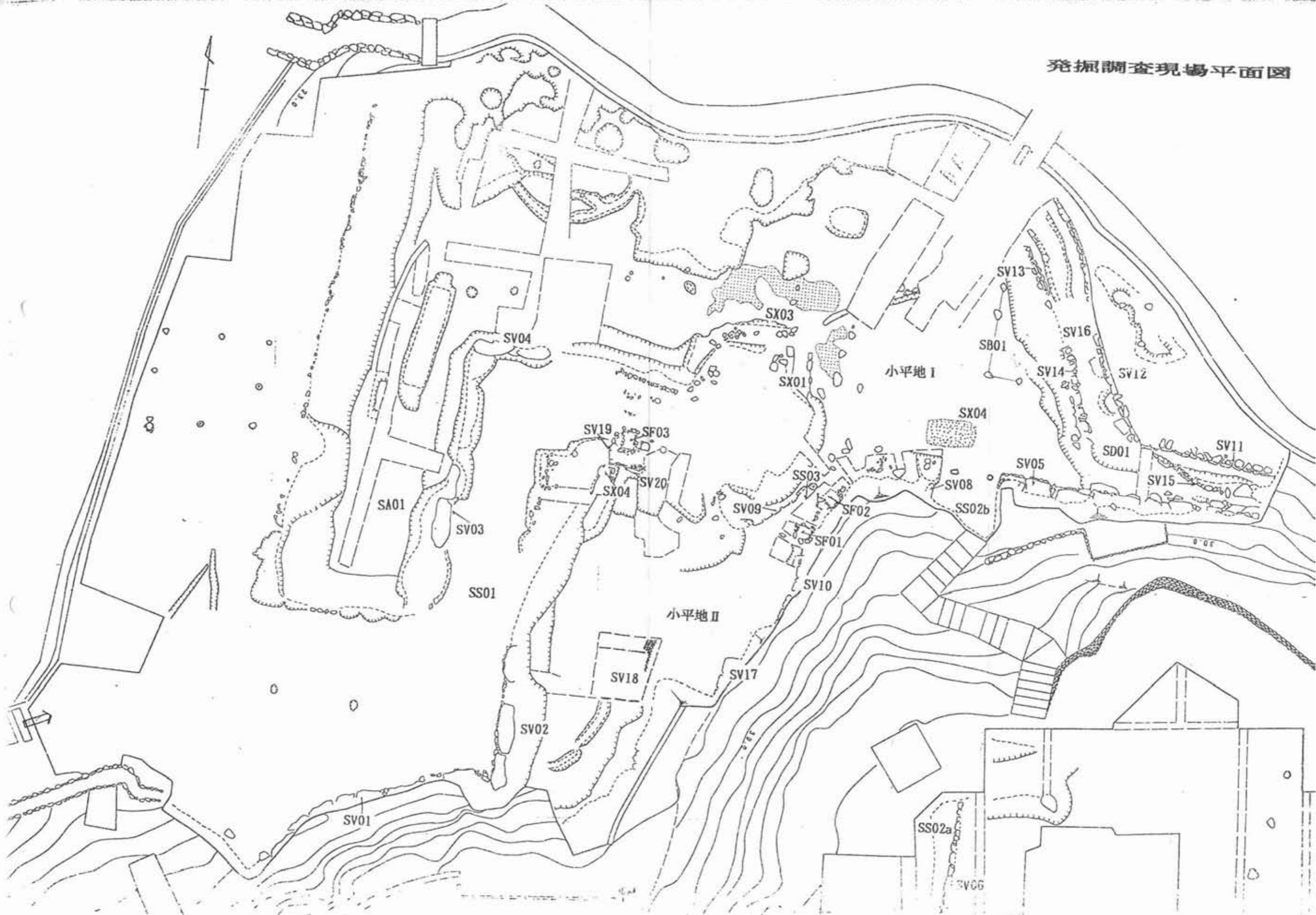
遺構・水路状遺構・礎石建物などを配した複雑な構造のものである。下層遺構は一部のみの調査であるが、石積み施設や特異な石垣など上層と際立った差異がうかがえる。中世から近世への転換点という時代にあって、時期を異にする遺構が重複しているというこの遺跡のもつ重要性の一つである。

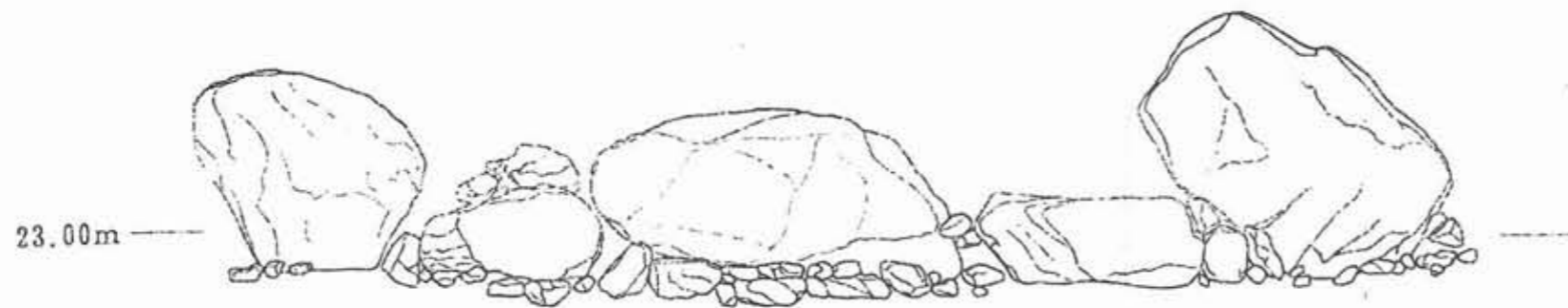
織田信長が稲葉山城主斎藤龍興を追放した際建設したという居館の伝承はよく知られているが、今までのところ居館の建物そのものと断定できる遺構はみつかっていない。また、おそらく広大な領域をもつと思われるこの遺跡のごく一部が明らかにされたに過ぎない。このため「信長館」の伝承と今回の発掘調査で発見された遺構を直ちに結びつけるには、まだ些か材料不足の感が否めない。ただ出土遺物からみて、少なくとも通路部分は信長在城中にはすでに機能していたことが推定でき、それから推して上層遺構の成立年代を信長を含めてそれ以前、と考えることもできる。旧状の大幅な改変から見てこれを信長の建設に係るものとした場合、下層遺構はそれよりさらに前の斎藤氏時代のものである可能性も考えられる。こうした見通しを踏まえ、出土遺物等の整理など今後の調査を進める過程でより詳細な検討を加え、遺跡の性格究明を期したい。

稲葉山城・岐阜城略年譜

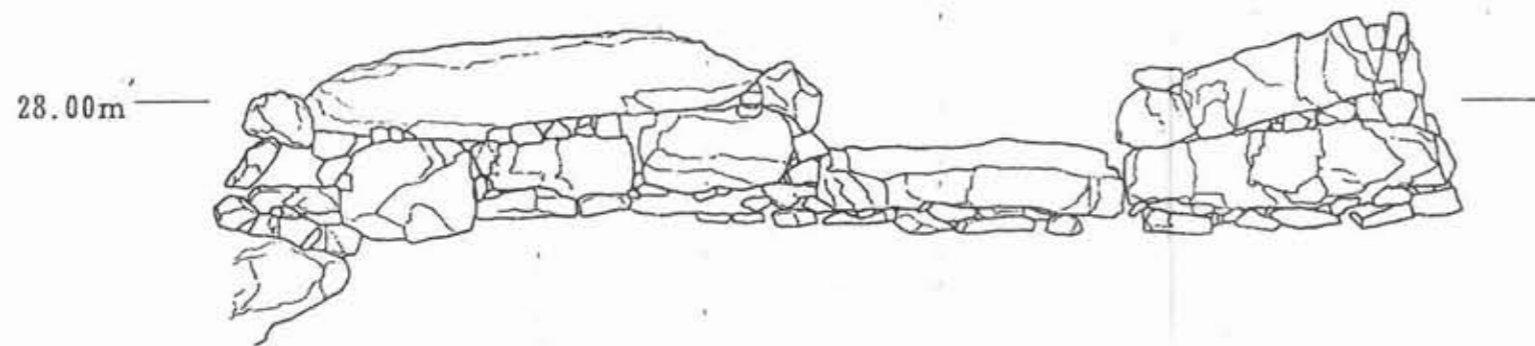
- 天文10 (1550) 斎藤道三、義龍に稲葉山城を譲り引退。
弘治 2 (1556) 斎藤義龍、道三を討つ。
永禄 4 (1561) 斎藤義龍死去し、子龍興家督をつぐ。
永禄10 (1567) 織田信長、斎藤龍興を追放。井口から岐阜に改名し、岐阜築城。
永禄12 (1569) ルイス・フロイス岐阜来訪、城と館を案内される。
天正 3 (1575) 信長、家督を長男信忠に譲り、岐阜城主とする。
天正 4 (1576) 信長、安土へ移る。
天正10 (1582) 本能寺の変。織田信孝が岐阜城に入る。
天正11 (1583) 豊臣秀吉、池田元助を岐阜城主とする。
天正13 (1585) 秀吉、池田輝政を岐阜城主とする。
天正19 (1591) 秀吉、豊臣秀勝を岐阜城主とする。
天正20 (1592) 秀吉、織田秀信を岐阜城主とする。
慶長 5 (1600) 秀信、関ヶ原戦の前哨戦で石田三成方につき、岐阜落城。

発掘調査現場平面図

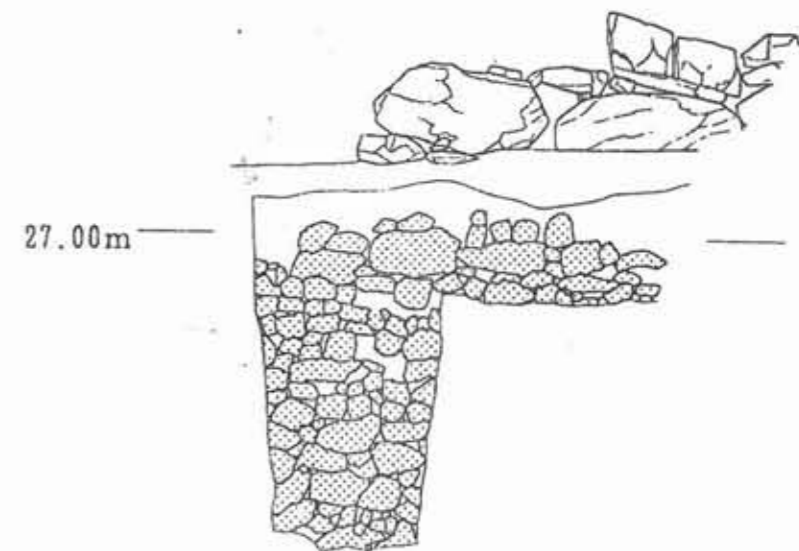




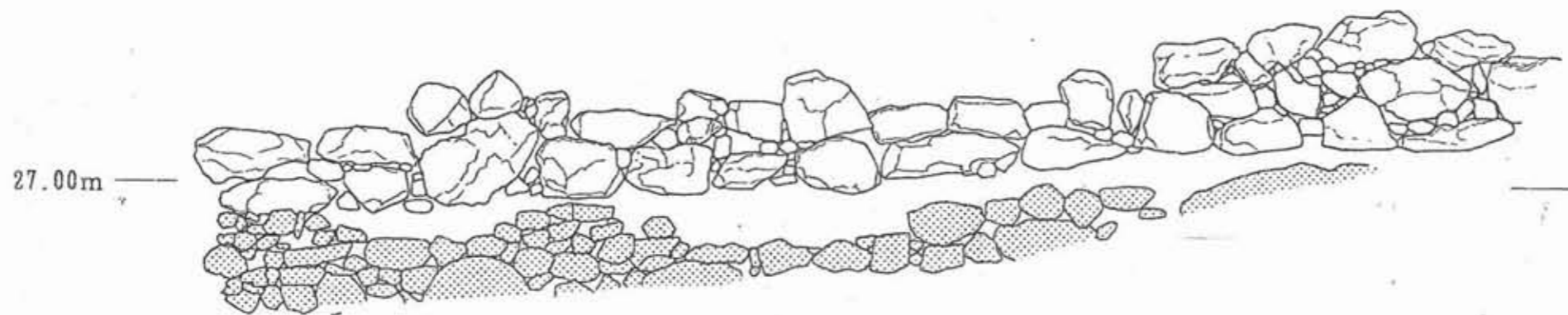
巨石列SV.01立面图



石垣SV.05立面图



石垣SV.17·18立面图



石垣SV.11·15立面图

